

北海道における幼児教育の諸問題と教員養成の展望(2)

—— 幼稚園教育の実際と短期大学の役割 ——

The problems of infant education in Hokkaido and teachers trainings (2)

—— Actual infant education and Role of the college ——

石崎一記	野崎嘉男
Kazuki ISHIZAKI	Yosio NOZAKI
晴山紫恵子	関谷正子
Shieko HAREYAMA	Masako SEKIYA

I 序

幼児教育に対する高い期待に応えるため、幼児教育の現場では、特に私立の幼稚園において、独自の教育理念に基づいた個性的な教育の実現のために様々な試みが行われている。社会の情報化や環境問題への関心の高まり、ますます進む国際化といった社会情勢の変化は、幼児教育の現場にも少なからず影響を及ぼしている。逆に一切こういった「特別の活動」は行わず、「遊ぶ」ことだけを通して子供の発達を促すことに取り組んでいることを特色としている幼稚園も多い。そのような中、平成2年4月1日より施行された幼稚園教育要領は、新しい時代にふさわしい教育を実現するための指針を打ち出すものである。施行以来既に5年が経過しているが、教育現場ではその混乱をどのように克服し教育活動の充実を図っているのだろうか。

一方、質の高い教育の実現のためには、教師の質の向上が不可欠の要素である。平成元年度より施行された教育職員免許法の改正も、このような認識に基づいている。質の高い教員の養成は、大学における教員養成と現場での教育体制との2つの側面から考えるべき問題であろう。同時に研究機関としての大学は何を期待され、どのような役割を果たすことができるのだろうか。

これまでこういった問題に、北海道という地域の特性を考えながら取り組んできた。筆者らは本研究第1報において、公表資料の分析を通して道内の幼稚園の設置状況において、第1に地域による状況の違いが大きいこと、第2に就園率の上昇で補えない程度の幼児数の減少が見られ3歳児受け入れを促進させていること、第3に全国の平均と比較して私立の割合が高いことを指摘した。さらに、筆者らの問題意識を整理する中で、調査法を用いた情報収集と分析に基づく検討の必要性を指摘した。

本稿では、これら基本的な視点と問題意識に基づいて行われた調査の結果を報告する。

Ⅱ 調査の概要

1. 質問紙の概要

第1報において指摘された点のうち、以下について質問紙法によって調査された。

(1) 幼児教育の理念に関して

- ① 教育を支える思想的な柱はなにか。
- ② 幼児教育の在り方について、12項目があげられ、それぞれについてどの程度賛成であるかが尋ねられた。

(2) 幼稚園教育要領の改正に関して

- ① 第1章にあげられた総則の「幼稚園教育の基本」にある表現の中からいくつかを取り上げられ、それぞれについて新しい視点であるか、表現の変更、従来通りのいずれと考えているかが尋ねられた。

- ② 従来の6領域との関係で現行の領域がどのようにとらえられているか、関係する8の記述について、それぞれどの程度賛成であるかが尋ねられた。

- ③ 教育要領が改正されたことによって教育活動において変更になった点があるかどうか尋ねられた。

- ④ 教育要領の記述で理解できない点、賛成できない点があるかどうか尋ねられた。

(3) 行事に関して

- ① 行事に関する10の記述それぞれについて、賛成であるか反対であるかが尋ねられた。

(4) 幼稚園教諭の養成に関して

- ① 幼稚園教諭として適した性格があるか、ないか考えるかが尋ねられた。
- ② 資質に関係すると思われる13の項目について、それぞれどの程度必要であるか考えるかが尋ねられた。
- ③ 幼稚園教諭を志望する学生が就職前にどの程度身に付けておく必要があると考えられるか、24の技術、能力それぞれについて尋ねられた。

2. 手続き

質問紙は郵便により道内627園すべてを対象に送付、回収された。回答は1週間程度を目安に行うことが求められた。

152園より回収され、回収率は24.2%であった。

Ⅲ 結果と考察

1. 幼児教育の理念に関して

(1) 思想的な柱

現在日本の幼児教育において、一般的に見られる宗教及び教育思想家合計14のうちどれを園の教育を考える上での柱とするかについての結果が表1である。半数以上が特別なものはない

と答えている。これらの園においては、実際の教育活動を考える上での実質的な柱は幼稚園教育要領であると考えられる。実際、余白にその旨記述された回答用紙も散見された。回収率が高いとは言えないため、これが直ちに北海道における幼稚園の傾向とは言えないが、私立が大きな割合を占める中、教育要領を唯一の拠り所として教育活動を考える園は決して少なくない。

(2) 幼児教育の在り方について

幼児教育の在り方に関係すると思われる12項目についてどの程度賛成しているかの結果が表2である。全くそう思うに5点、ややそう思うに4点、どちらとも言えないに3点、ややそう思わないに2点、全くそう思わないに1点をそれぞれ付与し平均を求めたところ、最も記述に

賛成であったのが「教師も教育環境の一部である（平均4.88以下同様）」であった。以下「幼児期にふさわしい生活が展開されるように配慮するべきである（4.83）」、「幼児の直接体験を豊富にするように心がけるべきである（4.75）」、「幼児一人一人の特性に応じた指導をしなければならない（4.74）」、「幼児の主体的な活動を促すように心がけるべきである（4.73）」、「幼児教育は環境を通して行うべきである（4.72）」、「幼児一人一人の発達の課題に即した指導をしなければならない（4.64）」と、幼稚園教育要領に直接関係する記述のある項目は、いずれも高い賛成が示された。「指導の際には教師自身も楽しむことが大切である（4.56）」は、教育要領の視点を動機づけの観点から表現したものであるが、やはり同様に高い賛成が示されている。一方、「幼児期に育てるべき能力を考慮して意図した遊びに持っていけるのが優れた教師である（3.83）」は、最も意見が分かれている。前述の「主体的な活動を促す」に多くの人が賛成していることと考えあわせると、何をやるか、どのようにやるかまでも幼児が決めるような、幼児の主体性をあくまでも尊重した教育活動を標榜する立場と、教育活動を意図するのは教師であるがそれを幼児に強制はしないという立場とが内在しているのかもしれない。主体的の意味を厳密に捉えるならば、前者の考え方に近くなるが、それでは果たして幼稚園教諭の役割は何であるのかという問に対する答えは明確ではないのだろう。その背景には、「主体性」という言葉自体明確な定義もなく幼児教育の現場でよく用いられているという事情も関係していると思われる。同じことが「ただ遊ばせているだけでは教育にならない（4.23）」「幼児の自然な生活の流れに即した指導が望ましい（4.05）」「遊びは与えられるものではなく、幼児自身が見つけたり作り出したりするものである（4.28）」が比較的低い平均であったこととも共通している。

表1 教育思想の柱

	園 数	%
1. 特別のものはない	84	55.3
2. キリスト教	19	12.5
3. 仏 教	14	9.2
4. 神 道	0	0.0
5. その他の宗教	0	0.0
6. J. J. ルソー	0	0.0
7. J. H. ペスタロッチ	1	0.7
8. J. F. オーベルラン	0	0.0
9. R. オーウェン	0	0.0
10. F. フレーベル	2	1.3
11. M. モンテッソーリ	0	0.0
12. J. デューイ	2	1.3
13. J. ピアジェ	0	0.0
14. R. シュタイナー	0	0.0
15. 倉橋惣三	6	3.9
16. その他	13	8.5
合 計	152	100

表2 幼児教育の在り方について

	全 く そ う 思 う	や や そ う 思 う	ど ち ら と も い え な い	や や そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	無 回 答	合 計
幼児教育は環境を通して行うべきである	114 75.0	31 20.4	4 2.6	1 0.7	0 0.0	2 1.3	152 100.0
教師も教育環境の一部である	140 92.1	6 3.9	4 2.6	1 0.7	0 0.0	1 0.7	152 100.0
幼児の主体的な活動を促すように心がけるべきである	114 75.0	33 21.7	2 1.3	1 0.7	0 0.0	2 1.3	152 100.0
幼児にふさわしい生活が展開されるように配慮するべきである	128 84.2	21 13.8	2 1.3	1 0.7	0 0.0	1 0.7	152 100.0
幼児一人一人の特性に応じた指導をしなければならない	116 76.3	28 18.4	5 3.3	0 0.0	0 0.0	3 2.0	152 100.0
幼児一人一人の発達の課題に即した指導をしなければならない	104 68.4	37 24.3	7 4.6	1 0.7	0 0.0	3 2.0	152 100.0
幼児の自然な生活の流れに即した指導が望ましい	58 38.2	54 35.5	26 17.1	8 5.3	3 2.0	3 2.0	152 100.0
幼児の直接体験を豊富にするように心がけるべきである	116 76.3	31 20.4	3 2.0	1 0.7	0 0.0	2 1.3	152 100.0
ただ遊ばせているだけでは教育にならない	84 55.3	31 20.4	24 15.8	2 1.3	7 4.6	3 2.0	152 100.0
遊びは与えられるものではなく、幼児自身が見つけたり作り出したりするものである	70 46.1	55 36.2	21 13.8	2 1.3	1 0.7	3 2.0	152 100.0
指導の際には教師自身も楽しむことが大切である	96 63.2	42 27.6	10 6.6	1 0.7	0 0.0	3 2.0	152 100.0
幼児期に育てるべき能力を考慮して意図した遊びにもっていけるのが優れた教師である	44 28.9	47 30.9	44 28.9	7 4.6	5 3.3	5 3.3	152 100.0

2. 幼稚園教育要領の改正に関して

(1) 幼稚園教育要領の変更点について

幼稚園教育要領の第1章総則にある幼稚園基本から6つの表現をとりだし、それぞれが今回の改正で初めて導入された視点であるか、いままでも同じ考え方であったが表現が変更されたものであるか、従来通り変わっていないものであるかを尋ねた結果が表3である。いずれの項目も同様の傾向を示し、新しい視点であるが28.3%から42.8%、表現の変更であるが28.9%から37.5%、従来通りが21.7%から30.3%の範囲であった。しかし、中でも新しいものと比較的に考えられているものは、「教師は幼児と共によりよい教育環境を創造する(42.8%)」と「幼稚園教育は環境を通して行うもの(42.1%)」であった。また、「幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること(37.5%)」と「幼児一人一人の発達の課題に即した指導をすること

表3 幼稚園教育要領について

	新しい 視点	表現 の変更	従来 通り	そ の 他	無 回 答	合 計
「幼稚園教育は（中略）環境を通して行うもの」	64 42.1	47 30.9	34 22.4	0 0.0	7 4.6	152 100.0
「教師は（中略）幼児と共によりよい教育環境を創造する」	65 42.8	45 29.6	33 21.7	1 1.7	8 5.3	152 100.0
「幼児の主体的な活動を促（すようにすること）」	58 38.2	47 30.9	40 26.3	0 0.0	7 4.6	152 100.0
「幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」	43 28.3	57 37.5	45 29.6	0 0.0	7 4.6	152 100.0
「幼児一人一人の特性に応じ（た）指導をすること」	54 35.5	44 28.9	46 30.3	1 0.7	7 4.6	152 100.0
「幼児一人一人の（中略）発達の課題に即した指導をすること」	46 30.3	52 34.2	46 30.3	1 0.7	7 4.6	152 100.0

（34.2%）」は、表現の変更であると考えている傾向が比較的高い。「幼児の主体的な活動を促すようにすること」と「幼児一人一人の特性に応じた指導をすること」は、3つへの回答が比較的等しく分散した。

（2）領域の捉え方

従来の教育要領との変更点について、良く見られる解釈に基づいて8つの項目を上げ、それぞれについてどの程度賛成であるか尋ねたところ、表4の結果が得られた。全くそう思うに5点、ややそう思うに4点、どちらとも言えないに3点、ややそう思わないに2点、全くそう思わないに1点をそれぞれ付与し平均を求めたところ、最も記述に賛成であった項目は、「人との関わりをもつ力を育てることが強調されるようになった（4.21）」であった。他に比較的賛成の意見が多かったものは「自然とのふれあいや身近な環境とのかかわりを深めることが強調されるようになった（4.17）」である。「健康」のねらいや内容は従来と同じである（3.63）「基本的な生活習慣や態度を育成することが強調されるようになった（3.61）」は、賛成の方がやや多いものの「ややそう思わない」という回答も少なくない。「言葉」のねらいや内容は従来の「言語」と同じである（3.29）、「人間関係」のねらいや内容は従来の「社会」の一部を独立させたものである（3.13）、「表現」のねらいや内容は従来の「音楽リズム」と「絵画製作」をあわせたものである（2.95）、「環境」のねらいや内容は従来の「社会」の一部と「自然」を合わせたものである（2.97）」については、賛成反対の態度がほぼ拮抗している。同じ教育要領でも、幼稚園によって改正点の解釈の仕方は様々であることがうかがえる。

（3）教育活動の変更

教育要領の改正に伴って教育活動において変更になった点があるかどうかを尋ねた結果が表

表4 5領域のねらい及び内容について

	全 く そ う 思 う	や や そ う 思 う	ど ち ら と も い え な い	や や そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	無 回 答	合 計
「健康」のねらいや内容は従来と同じである。	29 19.1	64 42.1	22 14.5	19 12.5	7 4.6	11 7.2	152 100.0
「人間関係」のねらいや内容は従来の「社会」の一部を独立させたものである。	14 9.2	49 32.2	37 24.3	26 17.1	16 10.5	10 6.6	152 100.0
「環境」のねらいや内容は従来の「社会」の一部と「自然」を合わせたものである。	14 9.2	44 28.9	28 18.4	32 21.1	22 14.5	12 7.9	152 100.0
「言葉」のねらいや内容は従来の「言語」と同じである。	18 11.8	59 38.8	23 15.1	31 20.4	11 7.2	10 6.6	152 100.0
「表現」のねらいや内容は従来の「音楽リズム」と「絵画製作」をあわせたものである。	15 9.9	36 23.7	34 22.4	41 27.0	16 10.5	10 6.6	152 100.0
人とのかかわりを持つ力を育てることが強調されるようになった。	58 38.2	66 43.4	14 9.2	2 1.3	3 2.0	9 5.9	152 100.0
自然とのふれあいや身近な環境とのかかわりを深めることが強調されるようになった。	64 42.1	54 35.5	20 13.2	3 2.0	4 2.6	7 4.6	152 100.0
基本的な生活習慣や態度を育成することが強調されるようになった。	31 20.4	49 32.2	47 30.9	14 9.2	4 2.6	7 4.6	152 100.0

表5 教育要領の改正に伴う対応と疑問

	あ る	な い	無 回 答	合 計
教育要領の改正に伴って教育活動において変更になった点がありますか	51 33.6	69 45.4	32 21.1	152 100.0
現在の教育要領のなかで、良く理解できない点がありますか	13 8.6	122 80.3	17 11.2	152 100.0
現在の教育要領のなかで、現場の立場からは賛成できない点がありますか	16 10.5	118 77.6	17 11.2	152 100.0

5（第1欄）である。変更になった点があるという園が51園で33.6%，ないという園が69園で45.4%であった。ほぼ半数を占める変更がなかったという園の多くは、その理由として教育要領が改正される以前から現行の教育要領にかなった教育を行っていた点をあげている。

(4) 教育要領への疑問

現在の教育要領のなかで、良く理解できない点、現場の立場からは賛成できない点があるかどうかを尋ねた結果が表5（第2，3欄）である。良く理解できない点があるという回答が13園（8.6%），ないという回答は122園（80.3%）であった。また、現場の立場からは賛成できない点がある（16園，10.5%）という園は少なく、大部分はない（118園，77.6%）と答えて

いる。

3. 行事に関して

(1) 行事に関する10の記述それぞれについて、賛成であるかが尋ねられた。その結果は表6である。最も賛成が多かったのが「行事の実施を考えるとときには子供たちの発達のことが最も重視される (90.1%)」であった。以下「子供の発達のために積極的な意味を持っている (82.9%)」, 「行事を設けることで日常的な教育や保育の区切りになる (71.1%)」, 「行事は日常的教育活動の成果の発表の機会である (69.1%)」が高い割合を示している。逆に割合の低かった項目は「経営のためには、見栄えのする行事は不可欠である (11.8%)」, 「行事は日常的教育や保育の負担になる (15.8%)」であった。これらから、多くの園において日頃的教育活動の区切りとして子どもの発達を考慮した行事が計画されていることがうかがえる。この背景には、「どんな目標があっても、指導方法によって子供たちを教育することができる (37.5%)」わけではないので、無理に計画してもうまくいかないという実感があるのだろう。しかし、一方で「行事を計画する際には親や他の園のことも考慮しなければならない (63.2%)」側面もあり、「行事に合わせて日常的教育活動を計画 (する) (55.3%)」し、約1/3の園では「行事のためには特別的教育活動を組み立てることが必要である (33.6%)」という考え方もみられる。日常的教育活動と行事との関係は、この両観点のバランスの上で実施されていると見ることができるだろう。

表6 行事について

	は い	いいえ	その他	無回答	合 計
行事は日常的教育や保育の負担になる	24 15.8	118 77.6	2 1.3	8 5.3	152 100.0
行事を設けることで日常的教育や保育の区切りになる	108 71.1	33 21.7	0 0.0	11 7.2	152 100.0
行事は日常的教育活動の成果の発表の機会である	105 69.1	35 23.0	0 0.0	12 7.9	152 100.0
行事のためには特別的教育活動を組み立てることが必要である	51 33.6	88 57.9	2 1.3	11 7.2	152 100.0
行事に合わせて日常的教育活動を計画する	84 55.3	54 35.5	3 2.0	11 7.2	152 100.0
行事の実施を考えるとときには子供たちの発達のことが最も重視される	137 90.1	8 5.3	0 0.0	7 4.6	152 100.0
どんな目標であっても、指導方法によって子供たちを教育することができる	57 37.5	73 48.0	0 0.0	22 14.5	152 100.0
行事を計画する際には親や他の園のことも考慮しなければならない	96 63.2	41 27.0	1 0.7	14 9.2	152 100.0
経営のためには、見栄えのする行事は不可欠である	18 11.8	122 80.3	0 0.0	12 7.9	152 100.0
子供の発達のために積極的な意味をもっている	126 82.9	10 6.6	0 0.0	16 10.5	152 100.0

4. 幼稚園教諭の養成に関して

(1) 幼稚園教諭として適した性格があるかと思うか、ないかと思うかが尋ねられた。その結果は表7である。あるという答えが118園(77.6%)であった。確かに性格は変わり得るものであるし、特に短期大学で過ごす青年期はちょっとしたきっかけから大きな変貌を遂げる時期でもある。しかし、短い2年間で幼稚園教諭を志望するすべての学生にそれを期待することはできない。教育現場において資質や能力技術以外に、性格に関しても適性があると考えているならば、就職のことだけを考えれば入試において最初からそれに適った生徒を入学させることが必要なのであろうか。さらなる検討が必要である。

表7 幼稚園教諭としての適性

	あ る	な い	無回答	合 計
幼稚園教諭として向いている性格、向いていない性格はあるとお考えですか	118 77.6	18 11.8	16 10.5	152 100.0

(2) 資質に関係すると思われる13の項目について、それぞれどの程度必要であるかと思うかが尋ねられた。その結果は表8の通りである。過半数の園の必要不可欠であると答えた項目は、多い順に「子供に対する愛情(85.5%)」、「教育に対する情熱や使命感(80.9%)」、「教師の役割についての自覚(71.1%)」、「自分から進んで取り組む積極性(69.7%)」、「自分で勉強しようという向学心(66.4%)」、「子供から学ぼうという謙虚さ(59.9%)」であった。逆に必要不可欠であると答えた園が半数以下であったものは少ない順に「論理的に物事を考える能力(32.9%)」、「理想とする教育についてのしっかりとした考え(42.1%)」、「明確な子供観(42.8%)」、「子どもの発達についての知識(45.4%)」、「周囲の人にあわせられる協調性(46.7%)」、「指示されたことや教えられたことを聞ける素直さ(50.0%)」、「自分自身に対する厳しさ(50.0%)」であった。このことから、子どもへの愛情をエネルギーに、自分がやるべきことを進んで行える人物像を理想としていることが分かる。論理性や教育観、様々な知識を豊かに持った学生は、ともすると理屈ばかりが先行してやることをやらないというイメージがあり、それで敬遠されているようである。

(3) 幼稚園教諭を志望する学生が就職前にどの程度身につけておく必要があるかと思うか、24の技術、能力それぞれについて尋ねられた(表9)。高度な技術が必要であるという回答が最も多かったのは「礼儀・作法・正しい言葉遣い(39.5%)」であった。ついで「指導案の書き方(23.0%)」と基本的な事柄について非常に高い期待がある。このことは逆をいえば、このような基本的なことが充分でないということであるのかもしれない。指導技術に関しては「手遊び(17.1%)」、「絵本の読み聞かせ(16.4%)」が高い技術を求められている。以下「折り紙(13.2%)」、「紙芝居(11.2%)」、「救急法(11.2%)」が続く。高度な技術が必要であるという回答とある程度できることが望ましいという回答を加えた割合(カッコ内%)の順に「ピア

表8 資質について

	必要 不可 欠	あ っ た 方 が 良 い	必 要 で は な い	ど ち ら と も 言 え な い	無 回 答	合 計
子供に対する愛情	130 85.5	21 13.8	0 0.0	0 0.0	1 0.7	152 100.0
教育に対する情熱や使命感	123 80.9	28 18.4	0 0.0	0 0.0	1 0.7	152 100.0
周囲の人にあわせられる協調性	71 46.7	79 52.0	0 0.0	1 0.7	1 0.7	152 100.0
指示されたことや教えられたことを聞ける素直さ	76 50.0	73 48.0	1 0.7	0 0.0	2 1.3	152 100.0
自分から進んで取り組む積極性	106 69.7	45 29.6	0 0.0	0 0.0	1 0.7	152 100.0
論理的に物事を考える能力	50 32.9	94 61.8	2 1.3	5 3.3	1 0.7	152 100.0
自分自身に対する厳しさ	76 50.0	70 46.1	1 0.7	3 2.0	2 1.3	152 100.0
理想とする教育についてのしっかりとした考え	64 42.1	77 50.7	1 0.7	7 4.6	3 2.0	152 100.0
明確な子供観	65 42.8	69 45.4	3 2.0	12 7.9	2 1.3	152 100.0
教師の役割についての自覚	108 71.1	41 27.0	1 0.7	0 0.0	2 1.3	152 100.0
自分で勉強しようという向学心	101 66.4	50 32.9	0 0.0	0 0.0	1 0.7	152 100.0
子供の発達についての知識	69 45.4	80 52.6	0 0.0	1 0.7	2 1.3	152 100.0
子供から学ぼうという謙虚さ	91 59.9	58 38.2	0 0.0	1 0.7	2 1.3	152 100.0

ノ演奏 (95.4%)」, 「礼儀・作法・正しい言葉遣い (94.1%)」, 「絵本の読み聞かせ (91.4%)」, 「手遊び (87.5%)」, 「指導案の書き方 (86.8%)」, 「紙芝居 (85.5%)」, 「折り紙 (84.9%)」, 「描画能力 (82.9%)」, 「救急法 (80.9%)」, 「レクリエーション指導 (68.4%)」, 「植物栽培 (65.1%)」, 「視聴覚機器の操作 (64.5%)」, 「伝承遊び (凧上げ, 綾とりなど) (64.4%)」, 「粘土細工・彫塑 (63.2%)」, 「動物飼育 (58.5%)」, 「野外活動 (53.9%)」, 「ネイチャーゲーム (48.1%)」, 「ワープロ操作 (45.4%)」, 「水泳能力 (44.1%)」, 「マーチングバンド及びその指導法 (31.6%)」, 「スキー能力 (29.6%)」, 「キャンプ技術及びその指導 (27.0%)」, 「コンピュータ操作 (16.4%)」, 「英会話 (14.5%)」という回答であった。高度な技術が必要であるには上げられず, ここで高い割合を示したものの, 例えばピアノ演奏, 折り紙, 描画能力などは, ある程度はできないと

表9 技術・能力について

技 術 ・ 能 力	高 度	で き る	経 験	不 要	無回答	合 計
礼儀・作法・正しい言葉遣い	60 39.5	83 54.6	4 2.6	0 0.0	5 3.3	152 100.0
指導案の書き方	35 23.0	97 63.8	16 10.5	0 0.0	4 2.6	152 100.0
手遊び	26 17.1	107 70.4	13 8.6	0 0.0	6 3.9	152 100.0
絵本の読み聞かせ	25 16.4	114 75.0	8 5.3	1 0.7	4 2.6	152 100.0
折り紙	20 13.2	109 71.7	17 11.2	0 0.0	6 3.9	152 100.0
紙芝居	17 11.2	113 74.3	15 9.9	1 0.7	6 3.9	152 100.0
救急法	17 11.2	106 69.7	23 15.1	1 0.7	5 3.3	152 100.0
ピアノ演奏	15 9.9	130 85.5	1 0.7	2 1.3	4 2.6	152 100.0
レクリエーション指導	11 7.2	93 61.2	37 24.3	3 2.0	8 5.3	152 100.0
描画能力	7 4.6	118 78.3	20 13.2	0 0.0	6 3.9	152 100.0
植物栽培	7 4.6	92 60.5	44 28.9	0 0.0	9 5.9	152 100.0
粘土細工・彫塑	7 4.6	89 58.6	43 28.3	5 3.3	2 1.3	152 100.0
動物飼育	7 4.6	82 53.9	53 34.9	3 2.0	7 4.6	152 100.0
野外活動	6 3.9	76 50.0	54 35.5	4 2.6	12 7.9	152 100.0
視聴覚機器の操作	5 3.3	93 61.2	37 24.3	10 6.6	7 4.6	152 100.0
伝承遊び（凧上げ、綾とりなど）	4 2.6	94 61.8	42 27.6	3 2.0	9 5.9	152 100.0
水泳能力	3 2.0	64 42.1	68 44.7	7 4.6	9 5.9	152 100.0
マーチングバンド及びその指導法	3 2.0	45 29.6	66 43.4	26 17.1	12 7.9	152 100.0
ワープロ操作	2 1.3	67 44.1	58 38.2	17 11.2	8 5.3	152 100.0
ネイチャーゲーム	1 0.7	72 47.4	52 34.2	4 2.6	23 15.1	152 100.0
スキー能力	1 0.7	44 28.9	72 47.4	26 17.1	9 5.9	152 100.0
キャンプ技術及びその指導	1 0.7	40 26.3	73 48.0	24 15.8	14 9.2	152 100.0
英会話	1 0.7	21 13.8	65 42.8	52 34.2	13 8.6	152 100.0
コンピュータ操作	0 0.0	25 16.4	71 46.7	45 29.6	11 7.2	152 100.0

高度：高度な技術が必要なもの できる：ある程度できることが望ましいもの

経験：経験しておく程度で良いもの 不要：必要ないもの

困るがそれほど高度な技術を求められているのではないことが分かる。また、教育要領でも自然とのふれあいが強調されていることと連動して、植物栽培、動物飼育、野外活動やネイチャーゲームが比較的高い割合を示していることが注目される。それに比べて、コンピュータ操作、英会話等はあまり重要視されていない。情報教育や国際性教育の重要性が叫ばれるようになっているが、まだ、幼児教育での具体的な展開は行われていない。しかし、逆にこれらを導入している数少ない園では、これを一つの特色として教育を展開させているのかもしれない。

以上のことから、基本的なことが十分に身についた積極的な人材を教育現場は求めていることがうかがえる。

Ⅳ 終 わ り に

2つの研究を通して、現在の幼児教育現場が抱える問題点が明らかになるとともに、幼稚園教諭の養成機関としての短期大学でさらに検討しなければならない問題点が浮き彫りになった。全体的な傾向としては、教育現場との連携が充分でないという結論を出さざるを得ない。

今後、さらにこれらの点について実際の教員養成や教員の研究啓蒙活動の中で留意しなければならない点であると考えられる。

付 記

本研究は北海道女子短期大学における平成4年度教員特別研究費の助成によるものです。この特殊研究は本報告をもって終了いたします。

御多忙中調査にご協力頂いた道内各幼稚園の方々に心より御礼申し上げます。

文 献

石崎一記、野崎嘉男、晴山紫恵子、関谷正子：北海道における幼児教育の諸問題と教員養成の展望(1)

－研究の視点と課題－ 北海道女子短期大学研究紀要、第29号、p155－166、1993